

坂道に立つ女性たち

王詩妍

私たちはだれでもない、母親でもなく妻でも、だれかの娘でもない。

――『坂の途中の家』

『坂の途中の家』は角田光代が書いた小説です。主なあらすじは、小さい子供のいる里沙子が補充裁判員として我が子を虐待死させた母親の裁判に関わります。被告の水穂が八か月の娘を溺死させた事件です。審理が進むにつれ、里沙子は水穂と自分の境遇に近いことに気づきます。仕事を諦めて育児に専念し、苦勞しても当然だと思われ、夫は育児に参加せず、家庭内の冷たい暴力と歪んだ愛……裁判の最後に水穂は有罪となって入獄します。作者は里沙子の口を借りて「それは水穂のことではなく、私のことだ」と言わせ、現代の主婦の苦しい立場を率直に述べています。

女性のすべてが主婦になるわけではありませんが、『坂の途中の家』がこれほど好評なのは、角田光代が作品中で深刻な現実、女性の育児と自分の途中の家』価値との間にある巨大なギャップを暴露しているからです。こうしたギャップはほとんどすべての女性の生命の中に横たわっているものです。私たちは主婦であろうがなかろうが女性です。育児と女性はきつく結びつけられており、そのために社会環境は女性すべてが結婚して子供をもうけることを黙認しています。

すべての女性の生命の中に、直面せざるを得ない可能性が存在します。自分はいったいあの坂道に立つ女性になってしまうの？家庭のために自分がもともと得られるすべてを犠牲にしなければならないの？

「女は弱く母は強し」という言葉が広く伝わっています。平凡な女性が結婚して母親になるとなんでもできるように変わるとされているようです。この言葉は母親を賞賛するものですが、男権社会が母親の身にかぶせる圧迫と束縛でもあります。社会は母親たちを祭壇に押し上げますが、母親たちが「母は強し」を実現できないと、こぞって非難するのです。作中の里沙子と水穂もそうです。彼女たちは仕事をあきらめ付き合いを失い、すべてを子育てに差し出したと言うべきですが、子供が言うことを聞かなかつたり他の子より劣っていたりすると責められるのはやはり彼女たちなのです。身動きの取れない母親たちは心に悩みがあっても解決できず、周囲人は「母性本能」でお茶を濁すばかり。

作中では決して激烈な言葉の衝突を描写していません。激しい罵り合いはなく、対立の爆発はすべてひっそりと静かです。言葉の暴力は柔らかく温和に彼女の考えた言葉を包み込んでいるようで、悪意が察しにくいものになり、まして抵抗するなどあり得ません。さら

に恐るべきことはそうした悪意が常態になり、主婦自身さえ思考と決定を放棄して、そうした扱いを黙認し、自分が他の人に及ばないことを黙認して、最終的にすべてを失って沈黙するほかなくなり、弁解のできない操り人形になってしまうのです。

角田光代は以前、自分の創作の原動力とアイデアは怒りから生まれ、不公平な扱いを受ければ黙ってられないのだと語っています。彼女の作品では、母性本能に困惑し、育児と仕事のバランスにもがき、自己の女性のイメージを探そうと試みれば枚挙にいとまがありません。『八日目の蟬』では、不倫相手の赤子を誘拐して母としての愛を注ぎ四年間育てた野々宮希和子が逮捕されたときの最後の一言は「その子は朝ごはんをまだ食べていないの」自分が産んだ子供ではなくとも、希和子はやはり母親なのです。『対岸の彼女』では、離職から五年で職場に戻った小夜子が会社、保育園と家の間で奔走して、自由に垢抜けたキャリアウーマンの友人をうらやんでいます。そして『坂の途中の家』で影の重なり合う里沙子和水穂は、石ころ一つ投げ込んでさざ波を立てるぐらいで二人の境界線が崩れてしまいます。母親たちがそれぞれ愛と絶望を抱いていても、社会が少しも耳を貸さなかったため、悲劇が起きたのです。

角田光代が描いた物語は警句のようなものだと思います。社会の不公平さに対する警句です。彼女は社会の共通認識の中に潜む女性への悪意を探し出して、赤裸々な真実を読者に示しています。それまで、そうした悪意は部屋の中の象でした。存在していても、私たちは見て見ぬ振りしていたのです。

女は男に及ばない、女は理系に向かない、女は家で子供の世話をすべきだ、女には論理的思考がない、女は理不尽だ……こうした型通りの印象は女性の成長段階に伴ってきます。自ら懐疑を繰り返す中で、女性はついに環境のせいで型通りの女性になってしまうのです。

注意すべきことは、ここ数年来女性のエンパワーメント運動が盛んに発展していることです。Me Too運動やその韓国での広がりには多くの女性から支持が集まりました。女性の意識が次第に目覚めるにつれて、女性を描写した作品が多くに関心を呼んでいます。ここまで紹介した本の他にも『82年生まれ、キム・ジョン』、『ブラックボックス』、『房思琪の初恋の楽園』、『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』なども幅広い女性の共鳴を起こしています。女性作家は読者達と一緒に、型通りの印象を変えるべく力を尽くして、圧迫と性差別に反対し、互いに自己の価値を実現することを励ましています。

『坂の途中の家』を原作とするドラマで、裁判長は「はじめての育児に戸惑っているなか、周囲の人の言葉、夫の大声や罵声に恐怖を感じて、さらに自信をなくしたこと、だれにも助けをもらうことができなかったことや、助けを呼ぶこともできなかったことは、事実としては否定できない。被告人の罪は被告人が独りで犯したものだが、元をたどれば、本件に関わ

る、被告人の夫と家庭の構成員などを含むすべての人の各種の状況の混ざりあった結果、最終的に被告人にもたらした巨大な心理的圧力が根本的原因である」と話しています。

水穂の悲劇は起きてしまったことですが、元をたどれば社会の悲劇であり、こうした悲劇が里沙子にも繰り返されるのをどう防ぐべきなのかは、一人一人が深く考え努力するに値します。私たちの誰にも里沙子や水穂になる可能性があるからです。そして世界中の女性一人一人が彼女自身であることを心から期待しています。